えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第109号
令和元年
(2019)
5 − 6

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸の夏行事～今に継承されているものの由来～……1～3
えど友広小路……4～5
　会員からの投稿「金龍山浅草寺の今昔」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
学習会「葛飾区郷土と天文の博物館を訪ねる」……6
見学会　広重『名所江戸百景』周辺探訪―その20……7
えどはく探訪「銀座煉瓦街」……8
えど東京一景(16) ―檜町公園― ……9
江戸博クリップ「盆栽を育てる」……9
江戸名所図会を歩く…㊸［牛天神社から駒留橋］……10
第19回定期総会開催のご案内……11
催事案内／第10回「えど友会員発表会」の発表者募集……11～12

江戸の夏行事

～今に継承されているものの由来～

現在の夏は6月から8月までですが、江戸時代は4月から6月まででした。一見、季節が前倒しされているようですが、旧暦と新暦のずれから生じたものです。従って、今は6月に行っている衣替えを、当時は4月にしていました。一方では季節を考慮せず、同じ暦日を踏襲した行事もあります。

そんな江戸の夏行事の中から、今も続いているものとその由来をご紹介します。

暦日を踏襲した行事

お釈迦様の誕生を祝う「灌仏会(かんぶつえ)」(4月8日)や「端午の節句」(5月5日)などは、季節を意識することなく昔も今も同じ暦日です。そのため元は夏の行事でしたが、今は春の行事として行われるように変わりました。

同じように、七夕(7月7日)や盂蘭盆(うらぼん)(7月13～15日)などは秋の行事でしたが、現在は夏の行事として定着しています。しかし、まだ梅雨が明け切っていないことが多々あります。全国的には1カ月遅らせて、8月に行う所が多いのはそのためです。

▲東都名所 両国の涼　歌川国芳

旧暦と新暦

ここで旧暦と新暦の違いに触れておきます。江戸時代の暦は「太陰暦」と呼ばれ、月の満ち欠けによって1カ月の単位を決めていました。つまり新月から満月を経由して新月までが1カ月です。平均すると29.5日でした。実際には、1日が0.5日ということはありません。1カ月が30日ある「大の月」と、29日しかない「小の月」に

分けて運用していました。これを表す暦が「大小暦」ですが、1年に換算すると354日前後です。そのため「太陽暦」(現在の暦)に対し不足する日数分を2、3年に1度、1年が13カ月ある閏月を置くことによって調整していました。閏月を何月にするかは、幕府の天文方が季節とのずれを考慮しながら決めていました。

夏から春の行事へ

元々夏の行事であった灌仏会(花祭り)や端午の節句(こどもの日)が春の行事になったことにより、変わったこと変わらないことを見てみたいと思います。灌仏会は花御堂の真ん中へ誕生仏を置き、甘茶を注ぐ風習は今も変わりません。しかし春の4月は時に肌寒く、害虫も潜んだままです。だから誕生仏へ注いだ甘茶で墨を摺り、「千早振る卯月八日は吉日よ神さけ虫を成敗ぞする」と書いて柱に貼った、毒虫退散の風習は絶えてしまいました。

端午の節句は菖蒲の節句ともいわれるように、どこでも手に入る菖蒲が主役でした。子供たちが刀(菖蒲刀)にして、チャンバラ遊びができたのも、菖蒲が豊富だったからです。季節が前倒しになった現在では、温室育ちのため、菖蒲湯にしか使われないほど高くなりました。幟も鯉幟ではなく、鍾馗などの豪傑を描いた幟幢を立てるのが一般的でした。

江戸時代も後期になると、江戸を中心に柏の葉を使った「柏餅」が出てきます。柏の葉は新芽が出るまで古い葉が落ちないことから、子孫繁栄に通じると武士の間で喜ばれたようです。しかし、童謡「背比べ」にも♪ちまき食べ食べ兄さんが…と歌われているように、「粽」が圧倒的でした。柏餅が全国に拡がるのは昭和になってからです。

両国の夕涼み

隅田川の「川開き」といえば、すぐに両国の花火を連想するのは、江戸時代も同じです。両国で花火を打ち上げるようになったのは享保18年(1733)からです。前年に始まった大飢饉(享保の飢饉)とコレラの大流行に伴い、江戸でも多くの死者を出しました。そんな死者の霊を慰めるためと病魔退散を願い、幕府は両国で水神祭を実施しました。その際に花火を打ち上げたのが、隅田川花火の始まりです。

▲名所江戸百景　「両国花火」

当時は川開きより「夕涼み」という言い方が一般的でした。花火も5月28日の初日だけでなく、8月28日の千秋楽まで、スポンサーさえ付けば、毎日のように打ち上げていたからです。その花火を作っていたのが「鍵屋」と「玉屋」です。元々鍵屋だけでしたが、文化5年(1808)に鍵屋の番頭だった清七が独立し、玉屋市兵衛を名乗ったのが玉屋の始まりです。その後は両国橋の上流と下流で技を競いあったと伝わります。実際には「橋の上　玉屋々々の声ばかり　なぜに鍵屋といわぬ情(錠=鍵屋の掛詞)なし」の狂歌が残るように、玉屋の方が圧倒的に人気だったようです。ところが天保14年(1843)玉屋は火事を起こし、所払いになってしまいました。以来、鍵屋だけが歴史を伝えていました。

明治以降は時々中断しましたが、その都度復活しました。直近の中断は、昭和37年(1962)から同52年まででした。その後都民の声に押されて、同53年に「隅田川花火大会」と名前を変えて復活し、現在に続いています。

山開き

6月1日は、「氷室御祝儀」として、幕府は貯蔵していた天然氷を取り出して食べる日でした。民間では、寒の時期について餅網(袋)に入れ保存しておいた「氷餅(かき餅)」を、代わりに食べていました。『東都歳事記』が「町屋にても旧年寒水を以て製したる餅を食してこれに比らう」と載せています。

富士山や大山などの山開きもこの日行われました。当時の登山は宗教活動の一環でしたから、登拝する人は、水垢離などで身を清めて山へ向かいました。

▲富士講の一行（東都歳事記）　着色：福島信一

数ある山のなかでも富士山は古くから霊峰と呼ばれ、別格の存在でした。とりわけ角行東覚(1541～1646)の始めた富士講は、庶民に富士山信仰を広めるきっかけとなりました。

しかし、富士講が江戸市民の間で爆発的にはやるのは、食行身禄(1671～1733)が富士山烏帽子岩で断食修行を続けたまま入定したことによります。享保17年から始まった享保の大飢饉は、翌年には江戸へ飛び火、初めて打ち壊しがありまし

た。それでも何ら手を打たなかった幕府へ、抗議の意味を込めてです。そのことを知った江戸の人々は競って富士講信者となり、俗に八百八講といわれるほど隆盛するようになりました。

▲名所江戸百景「目黒元不二」

しかし当時の富士山は女人禁制だったので、女性は登拝することが許されませんでした。打開策としてミニチュア富士「富士塚」が築かれるようになりました。こちらは女性も含め誰でも登拝できたので、みるみ

▲名所江戸百景「目黒新富士」

るたくさんの富士塚が築かれるようになりました。中でも北方探検で知られる近藤重蔵が目黒の別邸に築いた「新富士」は、すぐ近くの「元富士」と共に、広重が『名所江戸百景』に描いたほど知られていました。

富士塚自体の高さは５～12ｍ前後と幅がありますが、風光明媚で本物の富士山が望める高台などに築かれたものは特に人気がありました。しかも本物へ登拝したのと同じご利益が得られるとされていました。ですから富士塚へ登拝する人たちも、６月１日(現在は７月１日)は、白衣に着替えて「六根清浄」と唱えながら登拝を行いました。品川富士や下谷富士などは、今もなお登拝行事を継承しています。

盆　踊　り

盆踊りは元来、盂蘭盆（うらぼん）の時期に先祖を慰める先祖供養の一環として踊られました。だから古くからのものは、念仏踊りの面影を残しています。東京都指定無形民俗文化財である佃島に伝わる盆踊りも、先祖供養の形を今に伝えています。

踊り会場には、「南無阿弥陀仏」と書かれた提灯が飾られ、正面には精霊棚が建てられます。棚の真ん中に「無縁仏」と書かれた掛け軸を掛け、野菜を供えるのが習わしです。精霊棚の前には、山盛りに線香を入れた火鉢が置かれ火がつけられます。踊り手はその前で精霊棚に手を合わせてから踊るのが習わしです。なぜそんなことをするようになったかは、佃島の位置と歴史に関係しているようです。

開府以来、江戸の街には死者が大勢出る大火事がたくさんありました。中でも明暦３年(1657)の大火は、江戸の大半を焼き尽くす大惨事でした。このとき避難民が殺到したのが、浅草見附門です。しかし、役人たちは門を閉ざしたまま開けなかったため、火の手に追われた人々は塀を乗り越え、次々と隅田川へ落ち溺死しました。その数３万人以上といわれます。

溺死者の多くは、三途の川(隅田川)を下り、六道の辻(佃島)に流れ着いて止まりました。そんな溺死者を慰め、供養するために始まったのが、佃島の念仏踊り(盆踊り)です。私が初めて佃踊り見学へ行ったとき、世話人と思える人に山盛りの線香を焚く由来を尋ねたところ、「死体の匂いよりはいいでしょう」と言われたことを今も思い出します。

実際、隅田川が三途の川であったことは、遊女や夜鷹の末路を見れば分かります。年取って商品価値のなくなった夜鷹を橋場で殺して捨てた、などという古川柳も残っています。「橋場」は吉原に近い人通りの少なかった隅田川上流、白髭橋付近のことです。夜鷹に限らず、隅田川を流れてきた無縁の人々をも一緒に供養する念仏踊りを、何時までも続けて欲しいと願うのは私だけでしょうか。

平成30年から踊りの主催者が分裂し、それぞれが別々の日に行うようになりました。例年通りの日程(7

▲佃踊り（絵本江戸風俗往来）

月13～15日)は新興の団体が、都の無形民俗文化財の方は１月遅れの８月13～15日の間に行うことで決着がついたようです。無形民俗文化財の方はこれまで通りを踏襲とのことですが、新興の方は精霊棚を仏壇に変え、掛け軸の文字も「南無阿弥陀仏」に変更、火鉢に大量の線香もありませんでした。

【参考資料】『東都歳事記』『絵本江戸風俗往来』『武江年表』『中央区史』(東京都中央区編)『佃島物語』(豊田靖人 ほか編)他

【取材】文：広報部会・光田憲雄

会員からの投稿

金龍山浅草寺の今昔

高野祐子

『江戸名所図会』輪読会のサークル活動に参加し、早いもので全７巻のうち、第６巻まで読み進んできた。第６巻「開陽の部」の巻頭は「金龍山浅草寺」である。44頁にも及ぶ記述のうち、今年の２月に私は浅草寺境内の念仏堂、地蔵の古碑など、巻頭の目録に掲げられた15の堂塔や石碑などを担当した。目録にあってしかるべき六角堂地蔵尊、銭瓶弁財天が他の文中にあったり、文中にもなく挿絵だけの楊枝店が目録にあったりで、著者の斎藤親子・孫の校閲不足を指摘したくなったが、原稿の完成を急いでいた故かとも思う。長谷川雪旦の挿絵は其の一から五まであり、絵中に描かれたそれらの建造物は116カ所、嘉永６年(1853)尾張屋版の古地図と首っぴきで15カ所を探した。ちなみに現在の「浅草寺西側境界図」によると、西側だけで68カ所である。

さて、問題はこの先、それらが現在もそこにあるか、である。答えは７、目録になかったものを含めて10。寛永19年(1642)２月の出火、1923年の震災、1945年の戦災で焼亡の後再建されたもの、されなかったもの、いろいろである。今はないものに西宮稲荷社がある。図会には「当山地主の神にして浅草の鎮守なり」とある。角川文庫本(昭和41年出版)の註には「明治以降千勝神社境内に合祀、戦災にて焼亡」とあり、千勝神社とは浅草神社の境内に建立された神社のようだ。そして本年１月１日浅草寺教化部発行の『浅草寺』 667号に掲載の「浅草寺ものがたり　江戸から東京へ―『浅草寺日記』(明治元～５年)刊行の意義―」にいきあたった。寄稿されたのは江戸博前館長竹内誠氏。氏は浅草寺日並記(ひなみき)研究会に所属し、「日記」刊行に貢献なさったわけであるが、寄稿の中で明治の「ご一新」の名のもとに新政府が打ち出した新政策の一つとして慶応４年(1868)３月に発布された神仏分離令について書いておられる。「神仏混淆で庶民の幅広い信仰を集めていた浅草寺にも、この変革がどっと押し寄せてきました。(中略)『浅草寺日記』の明治２年(1869)５月８日の記事によれば、東京府社寺局の役員２名が浅草寺において神仏分離が実際に実行されたか否かの調査に来寺しています。まず､本堂内にあった蛭子(えび)像(神像)をとり除いているかどうかを見分、確認後、そこを人々が参拝せぬように「空堂」と書いた札を掛け置くように指示(中略)西宮稲荷跡に不動明王を安置したか、それぞれ確認しています」と。浅草寺境内からは神様を一掃、換わって置かれた仏像は参拝禁止ということだろうか。神仏分離令で失われたものが多々あったことがうかがえる。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

２月19日(火)月番有田友二郎さんで国立演芸場にて、初春の落語６席、獅子舞、鹿芝居「嘘か誠恋の辻占」などを堪能した。参加者14人。

３月19日(火)月番山内啓巳さんの解説付きで「名人を受け継ぐ者たち」として五代目桂三木助(三代目桂三木助の孫)「たが屋」、柳家花緑(五代目小さんの孫)「二階ぞめき」、九代目林家正蔵(七代目林家正蔵の名跡を継ぐ)「ねずみ」、五代目桂米團治(三代目桂米朝の子)「はてなの茶碗」をビデオ鑑賞した。参加者17人。

◆藩史研究会

２月１日(金)國定美津子さんの発表。備中松山藩は岡山県高梁(たかはし)市周辺を藩領とした中小藩。元和(げんな)３年(1617)、鳥取藩主・池田長幸(ながよし)(外様)が６.５万石で入封。松山藩が成立。藩主は池田家から水谷(みずのや)家へと替わり、水谷家除封の後２年近く播州赤穂藩浅野長矩が城を預かり大石内蔵助が管理したという。その後安藤家、石川家と替わり、最後は板倉家が120年余り領有して終わる。戦国前期にこの辺りを治めていた高梁氏が防衛のため臥牛山(がぎゅうさん)に山城を構え、備中松山城と名を変えて現代も「天空の城」と呼ばれている。参加者７人。

３月８日(金)小関征三さんの発表。岡藩は豊後国の岡(大分県竹田市)を藩庁とし、直入・大野・大分郡で７万石を領する外様中藩。文禄３年(1594)、播州三木から中川秀成が入封し立藩した。岡城は平安末期に築かれ、「荒城の月」で知られる古城。秀吉死後、秀成は徳川につく。７代は浅野、８代は松平、10代柳沢、11代井伊、12代は藤堂氏からと､養子を迎えながらも13代迄続き、明治維新を迎えた。参加者14人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

２月21日(木)米屋久右衛門の「日記」明治８年10月28日～12月17日。参加者６人。

２月28日(木)「日記」明治８年12月18日～明治９年１月６日。地主である田中家も、町内所有地の地代値上げを通告し、地借たち一同の嘆願書が記されている。はげしいインフレの当時、値上げは一般のこととはいえ、15割(150％)増はさすがに格別の歩増だったのだろう。一割の減額案に対し「隣町の振合いをもって歩増」を願っている。ただ「当御地所内は格別の歩増はあるまじく一同安心していた」とあるから、これまでの田中家が悪徳地主であったわけではないようだ。参加者７人。

３月14日(木)「日記」明治９年１月７日～２月22日。田中家では２月初午の日に屋敷稲荷の祭礼をする。店の土蔵へ祭神を移し飾りつける。お参りにくる子供たちに竹の皮

に包んだ赤飯に煮しめを添えて渡す。この年に渡した子供の数は106人だった。参加者９人。

３月28日(木)「日記」明治９年２月23日～４月10日。参加者６人。

◆『江戸名所図会』輪読会

２月21日(木)高野祐子さんの担当。金龍山浅草寺の２回目。浅草寺境内にある念仏堂、閻魔堂、地蔵の古碑、護摩壇の跡、淡島明神社、西宮稲荷祠、平内兵衛像、石枕など建造物や史跡などに関しての記述。現在はすでにないものもあるが、嘉永６年の切絵図でそれぞれの項目の場所を確認した。参加者18人。

３月21日(木)杉村義三郎さんの担当。金龍山浅草寺の３回目は境内建造物の残りの説明と、本尊縁起による推古天皇の時代に始まる浅草寺の歴史、そして数々ある年中行事の解説がなされた。浅草寺には、修正会から始まって節分会まで、今でも引き続き行われている行事が多い。図会のころと現代と違うところは、節分会でまいているのが豆ではなく、守札であるのが本文でも挿絵でも分かる。参加者18人。

◆日本の大道芸伝承会

２月13日(水)発声練習と、来る３月16日(土)深川江戸資料館主催イベントへ応援出演することが決まったため、演目を定めて練習を行った。参加者４人。

２月27日(水)イベントのシナリオもほぼ完成。各自の出演演目を決めた。①かりんと売り②七色唐辛子売り③南京玉すだれ④地獄極楽など。参加者４人。

３月13日(水)イベント出演のため練習に励んだ。参加者４人。

３月16日(土)深川江戸資料館主催イベント「江戸の物売りと大道芸」へ日本大道芸・大道芸の会との応援出演。大勢の観客が集まり大いに盛り上がった。参加者４人。

◆江戸を語る会

２月23日(土)大森美恵子さんの「女性から見た忠臣蔵」と題しての発表があった。切腹した赤穂義士の妻や遺児たち、あるいはその他の赤穂義士たちに関する女性のお話だった。参加者８人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

２月24日(日)外歩きに適さない季節のため屋内の講演会とした第１弾。さいたま市大宮区にあるソニックシティ小ホールで開催されたイベントで、当サークル・太田資暁さんの講演「戦国時代と太田道灌～岩付城築城を中心として～」を他の聴講者に混ざって聴講した。参加者10人。

２月28日(木)同じく屋内の講演会第２弾。江戸川区平井にある「ひらい圓藏亭」で行われた当サークル世話人・松原良さんによる講座「落語を歩く(落語版聖地巡礼)・その６道灌」を聴講した。参加者32人。

３月24日(日)東京メトロ千代田線根津駅に集合、文明年間に太田道灌により千駄木に社殿が再建されたという根津神社に行き、参拝・見学したあと、不忍通りふれあい館に寄り、根津裏通りから弥生坂を歩き、サトウハチロー旧居跡や「弥生式土器発掘ゆかりの地」碑を見学、さらに境稲荷に参拝後、無縁坂を通って湯島へ歩いた。文明10年に太田道灌が再建したという湯島天神に参拝・見学したのち、銀座線上野広小路駅から田原町駅まで行き、太田道灌草創の祝言寺を参拝・見学して解散。参加者37人。

３月28日(木)１回目とほぼ同じコースを巡った。参加者29人。

◆文士散歩

３月23日(土)「小田原北原白秋を巡る」を実施。小田原駅西口に出て戦国武将北条早雲像を見ながら城山方面へ向かう。途中かなり急な階段を登りきると、後方には小田原城天守と相模湾の絶景。次に北原白秋の作詞した「この道」「砂山」の案内板を見る。そして白秋が住居し有名な「木兎(みみづく)の家」があった伝肇(でんじょう)寺へ。三好達治、谷崎潤一郎旧居跡前を通り小田原文学館・白秋童謡館へ。日本近代文学の祖、北村透谷や尾崎一雄、川崎長太郎、福田正夫などの作品資料を見る。小田原城址公園より小田原駅へ戻り解散。参加者７人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ａ班『新古改撰誌記』

間宮海峡が発見された文化六巳年(1809)のこと、西丸裏門番組同心小柳津久三郎の惣領久次郎は身持ちが悪く(不行跡)、親類一同で再三にわたり意見・忠告したが全く聞く耳を持たないので、此度親類縁者一統から縁を切ったことを上申した。但し、これにより父久三郎は肩身が狭く、勤めを続けにくいと聞いているので「不行跡」の文言を届書から削除出来ないでしょうか？　子供の事で父親の勤めに障るのは気の毒でありますから……。それならば「不行跡」の文言を「存寄相叶不申」(意見したが叶わなかった)と書き直して月番へ再提出しなさいということで、再提出し一件落着した。

この時代にも“粋な計らいをする上司がいた”という証明ですね?!

友の会めも(開催日と人数)

平成31年２月～３月

◆役員会２月12日(火)16人。３月12日(火)20人。◆事業部会２月５日(火)24人。３月５日(火)22人。◆広報部会２月19日(火)10人。３月19日(火)12人。◆総務部会２月26日(火)16人。３月26日(火)13人。◆古文書講座入門編：２月６日(水)午前75人・午後82人。３月６日(水)午前80人・午後77人。初級編：２月20日(水)午前66人・午後73人。３月20日(水)午前69人・午後64人。中級編：２月23日(土)午前36人・午後37人。３月23日(土)午前36人・午後33人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト ２月７日(木)Ａ班８人。Ｂ班８人。２月21日(木)Ａ班８人。Ｂ班７人。３月７日(木)Ａ班７人。Ｂ班７人。３月28日(木)Ａ班８人。Ｂ班８人。

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成31年２月14日）

葛飾区郷土と天文の博物館を訪ねる

冷たい北風が強い日でしたが、多くの参加者が集合時間の前から参集、これで15回目になる学習会が葛飾区郷土と天文の博物館で行われました。

初めに、高橋館長から２階の郷土展示室(常設展示室)は来年度リニューアルの予定であること、博物館としては珍しいプラネタリウムを備えていること、などの紹介がありました。続いて館の専門調査員である小峰園子さんより、スライドとレジュメを使って館の沿革、館内の紹介、展示の特長などの説明がありました。

▲体験学習室にて

館は平成３年７月に開館、２階の展示室については、葛飾区という地域の特殊性から展示されていることが簡潔に語られました。つまり、葛飾区は多くの河川に囲まれて低地が多く、江戸や東京から近い都市近郊である、ということからいろいろな道具や設備、また災害防止策などが整えられ、その一部が展示されていることです。

▲見学する皆さん

最後に館として、特に体験学習に力を注いでいることが強調されました。この地域がどのようにして成り立ってきたのかを学ぶために、考古学分野や民俗学分野という体験学習事業も用意しているので、興味のある方は参加していただきたいということでした。説明の後は適宜館内の自由見学です。

２階　郷土展示室

古代から中世にかけて使われていた器や土鍋、古墳時代の埴輪や土師器などの展示物が目を引き、歴史的な地域であることを感じさせます。

▲葛西船

古代の葛飾は広大でした。現在の江戸川、墨田、江東区から、千葉県の市川、船橋、松戸市、北部は埼玉県栗橋町や茨城県古河市まで広がっていました。その後、種々の変遷を経て葛西郡(葛飾、江戸川、墨田、江東区域)となり、以後近世まで葛西という名称で呼ばれていた、との表示があります。そばには葛飾区で出土した数種の井戸と井戸の木枠があり、その近くには“めぐみの水も時には害をもたらし、私たちの生活を苦しめました”という立札がありました。大きな白い帆をつけた葛西船(展示物は２分の１)の活躍で水運が栄える一方、時々起こる洪水から避難するための水塚(高く土盛りした上に立てた)も方々にあり、そのジオラマも並んでいました。また、田んぼに水を引くための水車(人が足踏みしたもの)や酒造り道具、肥桶なども展示されています。

▲ジオラマ（水塚）

３階　天文展示室／プラネタリウム

ここは、今いるこの地球が宇宙の中に位置し、その宇宙がどのように成り立っているかを学んでもらう展示室で、壮大な宇宙の仕組みを分かりやすく伝える各種の機械が並んでいます。太陽系の大きさや距離などが手に取るように理解でき、太陽の大きさに比べて、なんと地球の小さいことか、と今更ながら感じてしまいました。この階は最近リニューアルしたそうですが、“はやぶさ２特集”コーナーもあって、数枚の写真と並んで小惑星“リュウグウ”の岩肌を写した大きな写真が目を引きました。

▲天文展示室にて

参加者52人。

(住所　葛飾区白鳥３-25-１、京成電鉄・お花茶屋駅から徒歩約10分)

【取材】文・写真：広報部会　福島信一

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成31年3月31日）

広重『名所江戸百景』周辺探訪
―その20（旧中川・旧江戸川流域周辺）―

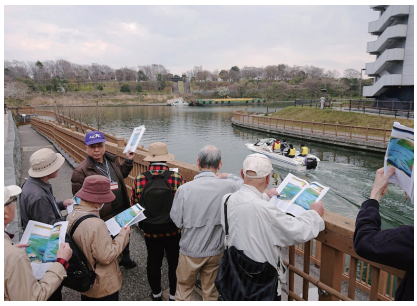
花曇りの日曜午後、都営地下鉄新宿線東大島（おおじま）駅に集合、班ごとに出発しました。

「逆井のわたし」絵

大島方面改札出口から新大橋通りを横断し、いくつかの橋を右手に見ながら大島小松川公園を通り抜けます。土手上の公園は折しも千本桜が咲き競っていました。暗渠になった竪川（たてかわ）上の高速道路の高架下をくぐり、荒川に並行する旧中川を見下ろした逆井（さかさい）橋の上流側が絵の場所になります。かつてこの渡しで中川を越え下総佐倉へ向かいました。絵には茂った葦、遊ぶ白鷺、渡し舟、向こう岸に小松川村、遠方に房総半島の山並みが描かれています。逆井という地名は、満潮のとき中川の水がこの辺りまで逆流したからとのことです。

「中川口」絵

公園の下の道を新大橋通りまで戻り、旧中川を左に見ながら進むと中川大橋のたもとに中川船番所資料館が見えてきます。少し先の小名木川と合流する地点に番所跡の案内板、旧中川沿いに「川の駅」、水陸両用バス発着所もありました。絵には中川番所、筏や塩を運ぶ船、小名木川河口に乗合船、奥に今は埋め立てられた新川が描かれています。ここは江戸と関東各地を結び、塩や物資、人を運ぶ重要な水路のため、この番所はいわゆる「入り鉄砲に出女（でおんな）」を厳しく取り締まる水上関所だったそうです。小名木川に架かるその名をとどめた番所橋を左後方に見て、第五大島小学校前から旧葛西橋までバスで移動しました。



▲中川船番所付近にて

「砂むら元八まん」絵

バス停から葛西橋通りまで進み、南砂元八幡通りを越した先の右側が富賀岡八幡宮です。干潟を開拓し造成した砂村に建立され、太田道灌なども崇敬したそうです。洪水の危険から富岡八幡宮として寛永6年(1629)深川に移築されますが、この地にも元八幡として残りました。今ここは堤防と水門に囲まれたゼロメートル地帯とのことです。絵には桜と鳥居、本所までの耕地、中川、深川洲崎からの一段高い道、海の向こうの房総半島などが描かれています。この後、倉庫街を抜け満開の桜並木の線路脇を進み、南砂町駅から浦安駅まで東西線で移動しました。

「利根川ばらばらまつ」絵

浦安駅から浦安橋と妙見島が見える渡し場跡に向かいました。この絵の場所だけが唯一特定できず、大田南畝の「～ 中川の ばらばら松に～」の歌などからここではないかとのことでした。絵には松や投網漁の舟、白鷺、白魚漁の投網は大きく描かれています。現在も漁が続けられ、魚を機械で陸上げする蒸気河岸跡近くで『青べか物語』の作者、山本周五郎の名が大書きされた船宿が今も営業していました。支流の境川をたどって進むと海の神様、清瀧（せいりゅう）神社です。木彫りの彫刻や、隣りあう大蓮寺の鐘楼が往時をしのばせます。

▲清瀧神社

「堀江ねこざね」絵

江戸湾に面していた堀江・猫実両村は度々津波に遭い、鎌倉時代に豊受（とようけ）神社近くに堤防を築き松を植えました。それ以降津波は松を越さず、「根をこさぬ」から「ねこざね」という地名になったそうです。江川橋辺りがこの絵の場所で、境川の左に堀江村、中央に境橋、右側に猫実村と豊受神社、千鳥（鴨とも）の網猟、行徳辺りに停泊の船、奥に富士山が描かれています。見学の最後に豊受神社を訪れ、かつて村人が植え6本に枝分かれした大銀杏に圧倒されました。

▲豊受神社と大銀杏

広重は剃髪した60歳から『名所江戸百景』の制作を始め、没年の安政5年(1858)、62歳で完結させました。今回は周辺探訪の最終回で、点在する「絵」の場所を巡ってバスと電車を乗り継ぎ、日帰りの小旅行のようでした。所要時間約3時間半、東西線浦安駅で解散しました。

参加者124人。シリーズ20回の合計2809人。

【取材】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・福田　徹

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

えどはく探訪

「銀座煉瓦街」で見える明治政府の意気込み

常設展５階の東京ゾーンを見たことはありますか？　江戸ゾーンの模型の精巧さに感激してしまい、朝野新聞社社屋の原寸大模型を横目に見て帰ってしまう江戸好きの会員が、案外多いかもしれません。

▲朝野新聞社原寸大模型

東京ゾーン入口は朝野新聞社

朝野新聞は明治７年(1874)創刊で、明治政府への辛辣な批評で人気を博しました。同９年、現在の銀座４丁目角、和光がある場所に移転しましたが、同27年、時計王といわれた服部金太郎が、この建物を買い取って屋上に無理やり時計塔を取り付けてしまいました。このエピソードは昨年５月の友の会総会記念講演で竹内名誉館長が話されましたので、ご記憶の方もあるかと思います。以来４丁目角の時計塔は、今も銀座のシンボルになっているのです。

▲銀座のシンボル時計塔

明治の銀座に思いを馳せる

朝野新聞社屋復元模型の裏側に回ってみましょう。係の方が、動いたりライトアップされたりする模型を説明してくれます。鹿鳴館の１/25縮尺模型など、明治政府が懸命に欧化政策に取り組んでいた様子をうかがい知ることができます。その一角、大きなガラスケースの中にヨーロッパの街並みのような銀座煉瓦街模型が展示されています。これは明治10年代後半の銀座を、縮尺1/25で再現したものです。

明治５年２月、皇居和田倉門付近から出火し、銀座、築地一帯を焼く大火が起こりました。その後、政府はすぐに銀座の復旧に着手し、西洋風の不燃都市建設を目指して、同10年、２階建ての建物を含む街並みが出現しました。アイルランド人のトーマス＝J＝ウォートルスというお雇い外国人が、ロンドンのリージェントストリートをモデルに設計しましたが、工事に当たったのは当時の大工や左官たちです。見たこともない西洋風建築群を短期間で造ってしまったのは、日本人の器用さ故でしょうか。

▲銀座煉瓦街模型

建物だけでなく、銀座を通行する人、馬車、人力車などが行き交う様子、果ては路上で悶着が起きている様などが、550体の人形で表現されています。よく見ると、一見西洋風なのに軒先に暖簾が掛かっていたり、ちぐはぐさには苦笑してしまいます。同時に大通りから外れた西洋風建築の裏には、江戸と変わらぬ庶民の暮らしぶりも見られて、当時の銀座の喧騒が聞こえてくるようです。

▲模型では悶着も再現

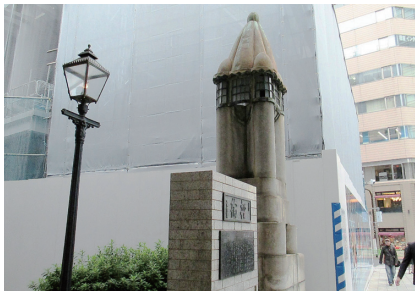
煉瓦街の遺構を訪ねる

朝野新聞社原寸大模型の向かい側に、銀座８丁目の工事現場で発掘された煉瓦が展示されています。大きさは幅220cm、高さ369cm、厚さ32cmで、フランス積み(正しくはフレミッシュ積み、フランドル積み)という手法で積まれたものです。フランス積みは、１段にレンガの長いものと小さいものを交互に積む方法です。かなり劣化が進んでいて、崩れている部分もありますが、大切に保存されているようです。ライトアップされているものの、薄暗いところにあって目立ちませんが、明治初期の風雨にさらされた煉瓦と思えば「お疲れ様！」と声をかけたくなりました。

▲金春通りの記念碑

この煉瓦が発見された銀座に出掛けてみました。最初に、現銀座８丁目８番地、金春通りにある記念碑を訪ねました。ここは江戸幕府お抱えの能役者四家の一つである金春家の屋敷があった場所です。ここで発掘されたフランス積み煉瓦に、当時の様子が彫金された銅板と、説明板が取り付けられた記念碑です。平日で、本通りの一本裏ですから、銀座とはいえ比較的静かなたたずまいでした。

本通りに出て京橋方面へ向かいます。江戸博の模型でも見た「木村家」など老舗も残ってはいますが、海外有名ブランドの店舗などが立ち並び、年々変貌していく銀座通りです。朝野新聞社があった和光前を過ぎて、お隣京橋との境、銀座１丁目に到着します。高速道路下に、「煉瓦とガス灯」という説明板があります。京橋はガス灯始まりの地だそうで、江戸博の模型に見られたガス灯の原寸大のものがここにあります。足元には発掘された煉瓦街の煉瓦が敷かれ、表現主義風の京橋の親柱(大正期)と共に記念碑になっているのです。ガス灯の灯柱は当時のものを利用しているそうで、この日も明かりがともっていました。



▲「煉瓦とガス灯」の碑

【取材】文・写真：広報部会・大橋弘依

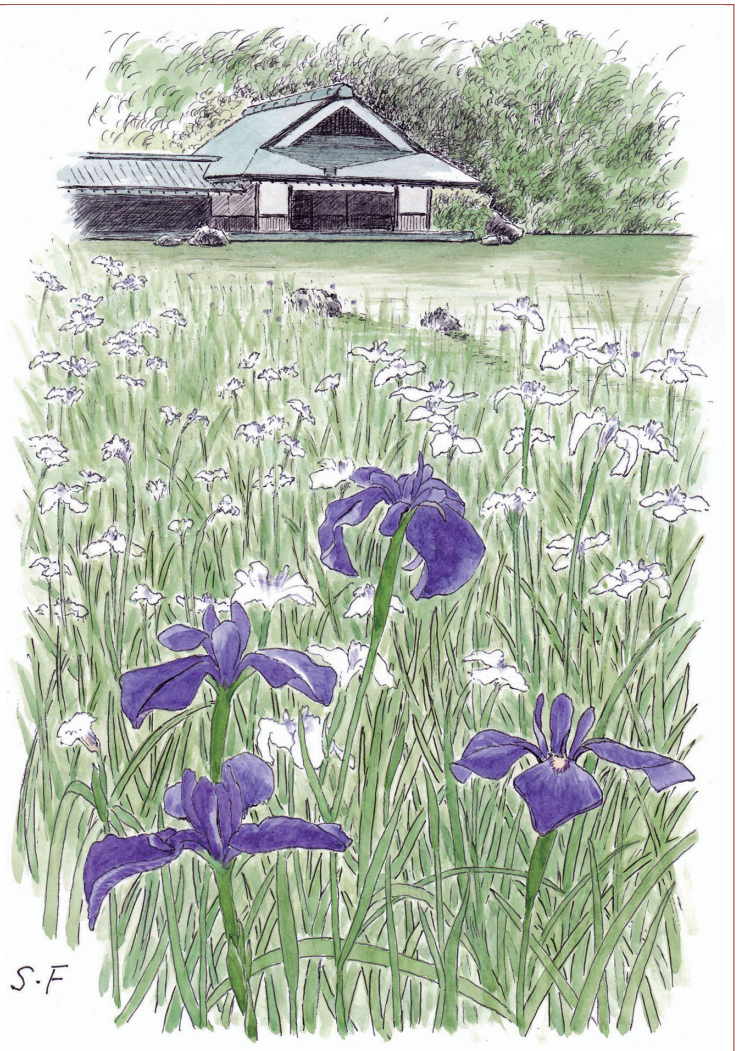
えど東京一景

(16) ―檜町公園―

六本木の東京ミッドタウンの裏に港区立檜町公園があります。正面からビルの間を抜けていくと低木の生い茂る小道があり、途中には渓流が造られています。その先は石に囲まれた池が広がり、奥にあずまやが配された回遊式庭園になっています。六本木の喧噪が嘘のような静けさで、まさに「都会のオアシス」です。さらに季節ごとに桜・ハナショウブ・アジサイ・紅葉などが目を楽しませてくれます。

公園とミッドタウンの辺りは、江戸時代には長州藩毛利家下屋敷でした。屋敷地は寛永13年(1636)に毛利家の嘆願により下賜されたもので、その後周辺の土地を農民からの預かり地として拡大、約3万6千坪の大きな下屋敷となりました。屋敷内に檜の並木があったため「檜屋敷」と呼ばれるようになり、庭は「清水亭」として江戸でも評判でした。舟遊びのできる大きな池には祠のある中島があり、周囲には観音堂・寺・神社・山道などもあって、かなり広大な庭だったようです。池の源は清水が絶えることがないため、清水亭の名が付きました。

明治時代になるとこの一帯は赤坂檜町となり、屋敷跡は歩兵第一連隊となりましたが、池だけは残されました。戦後は米軍の接収を経て防衛庁が当地に移転し、池の部分は整備されて昭和38年(1963)に都立檜町公園となりましたが、池はかなり縮小されてしまいました。同43年に港区の管轄となり、さらに防衛庁跡地へのミッドタウン建設に伴って再整備されて、平成19年に現在の姿となりました。



300年以上の時の流れを映してきた池の水面は、今も訪れる人の心を和やかにしてくれます。

【取材】イラスト：広報部会・福島信一
文：同・菊池真一

江戸博クリップ

盆栽を育てる

都市歴史研究室　司書　阿部陽子（あべ　ようこ）

昨年夏、ひょんなことから盆栽をつくるワークショップに参加しました。以前から興味はありましたが、育てる自信がなく、なかなか手を出せずにいました。参加者は10名ほど、年代もさまざまで、和気藹々。手順としては、①剪定をする、②鉢の入れ替え、③苔貼り、という流れです。

まず、盆栽用の「鉢」を選びます。私は様々なタイプの鉢の中から、某作家さんがつくったという薄い青緑色の小ぶりのものを選びました。次に、好みの「ニレケヤキ」を選んで、いよいよ剪定へ。普段あまり手にする機会のない剪定バサミがずっしり重く、またこの剪定が、細かい作業で難しく……。庭師の先生曰く、①枝ぶりは細かいほど良く、②枝は「真上」「真下」「真横」に伸びていたら切る、将来ぶつかりそうな枝も切る、しまいには、③枝が「良い方向に伸びている」かを“見極める”……。

次第に、この剪定作業に人生を重ねはじめる友人と私。枝葉はまさに人生の岐路。「あの時、思い切って○○していたら」などと言い合いながら、樹木の形を整えていきました。

うまくいけば幹も枝ぶりも大きくなり、寿命は10年から20年にもなるとか。新芽が伸びても、かわいそうで切ることができなかったのですが、何とか日々の水遣りと剪定をこなし、秋には無事に黄葉し、冬には落葉、そして最近また若芽が吹きはじめました。そろそろ、鉢の植替が楽しみな春到来です。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㊸

[牛天神社から駒留橋]

北野神社の狛犬

今回は文京区の神田上水跡に沿って歩きます。途中には神田上水に関する史跡や遺構が残されています。歩いたのは梅の花香る３月初めでした。

牛天神社から氷川明神祠

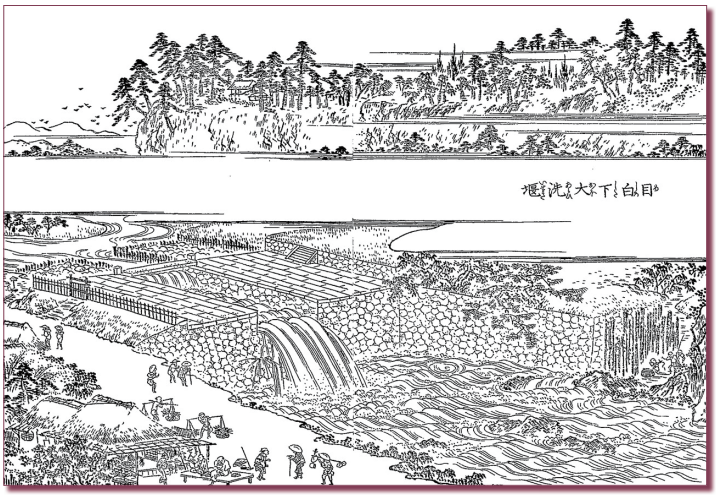
東京メトロ後楽園駅下車。小石川後楽園(旧水戸徳川家上屋敷)北側の通りを西へ進みます。牛天神下交差点を右に折れ、右手の坂を上がると牛天神社(現北野神社)の石段があります。源頼朝が牛に乗った菅原道真から吉事を告げられる夢を見た際、そばにあったという牛石が社殿の前に置かれていますが、牛に似ているかどうかは微妙なところです。また文化６年(1809)寄進の狛犬は、子犬が母犬の乳を吸っているという珍しいものです。境内には歌人中島歌子の歌碑があります。安藤坂にあった歌塾「萩の舎」塾主で、樋口一葉が師事したことは有名です。坂を下った向かいの小道に入ると諏訪明神社(現小石川諏訪神社)があります。牛天神別当の梅本坊乗観法師が創建したもので、現在の宮司は両社を兼任しています。

安藤坂交差点から先は巻石通りとなります。かつての神田上水の水路跡で、くねくねした道を歩くと上水の流れが実感できます。通りの名は明治10年(1877)ごろ石蓋(万年巻石蓋)で上水を暗渠化したことに由来しています。通りを進んで行くと右手には多くの坂が現れます。金剛寺坂下にあった彗日山金剛寺は中野区へ移転しています。今井坂脇の国際仏教学大学院大学は徳川慶喜の屋敷跡で、慶喜は明治30年から亡くなる大正２年(1913)まで居住していました。

荒木坂を過ぎると氷川明神祠(現小日向神社)の別当寺だった慈昭山日輪寺があります。神社は近くへ移転していますが、本堂の扉前には「日輪寺」と「氷川明神」の提灯が並んでつるされています。現在の小日向神社はさらに先の服部坂を上った左手にあります。明治の初めに付近の田中八幡神社と合祀してここに移されました。高台にあり昔はさぞ眺めが良かったと思われます。

大日堂から幸神祠

坂下右手の文京区総合福祉センター前には「神田上水旧白堀跡」の説明板があります。ここは区立第五中学校(旧黒田小学校)の跡地で、発掘調査により神田上水白堀(開渠の堀)の遺構が確認されました。保存された石積みが足元の透明板越しに見られます。近くの大日坂を上るとすぐ大日堂のあった妙足院があります。堂は現存していませんが、本尊の大日如来像はこぢんまりとした本堂の扉の隙間から見えます。



▲長谷川雪旦：目白下大洗堰

目白通りを渡って江戸川公園右側の目白坂を上ります。坂名は目白不動に由来し、この通りは「清戸道」と呼ばれていました。坂の中程には関口台の鎮守であった関口八幡宮(現正八幡神社)があり、かつては「上の宮」と呼ばれていました。狭い境内ながらも、樹木に囲まれた社殿は風格があります。神社の斜め前辺りに目白不動堂(新長谷寺)がありましたが戦災で廃寺となり、不動明王像は金乗院に移されています(前回記述)。さらに進んだ左手には幸神祠(現幸神社)があります。小さな祠だけでしたが、近年氏子により新しく狛犬が寄進されています。

大洗堰から駒留橋

手前の関口台小学校の脇道を進むと、江戸川公園を見下ろす崖に出ます。通路を下って行くと、現在の大滝橋付近にあった大洗堰の取水口が元の石柱を使って復元されています。江戸初期に大久保主水によって築かれた堰は、神田上水の水位を上げて水戸屋敷から神田・日本橋方面へ給水し、余水を江戸川(現神田川)に落としていました。図会の挿絵には大きな堰と勢いよく流れる水が描かれています。

公園を出て神田川沿いに進むと、椿山荘の先に関口芭蕉庵の正門があります。元は竜隠庵でしたが、上水改修工事に関わった松尾芭蕉が延宝５年(1677)から同８年までここに住んだため、芭蕉庵と呼ばれるようになりました。入り口は正門先の胸突坂を少し上った所にあり、庵の建物は戦後の新築ですが、瓢箪池のある庭は自然そのままの趣があります。多くの句碑や歌碑などが点在し、最も奥まったところには後の俳人たちが芭蕉の短冊を埋めて墓とした「五月雨塚」があります。

坂を挟んだ向かい側には水神社と「下の宮」と呼ばれた椿山八幡宮がありましたが、八幡宮は廃絶しています。水神社は神田上水の守護神として、神田・日本橋方面からの参詣者で賑わいましたが、今は木立の間に祠だけがひっそりと立っています。坂の正面に架かる駒塚橋は江戸時代には少し下流にあり、駒留橋から江戸末期には駒塚橋と名が変わっていたようです。ここから東京メトロ江戸川橋駅へ向かいました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：

広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

第19回定期総会開催のご案内

江戸博全館再開目前の総会で、今後の友の会の活動を確認しよう

今年も友の会定期総会の季節がやってきました。定期総会は会員が一堂に会し、過去1年間の活動を振り返るとともに、本年度の活動について率直な意見交換のできる場です。一昨年10月から全館休館していた江戸博は常設展示室と図書室が昨年4月から再開されました。特別展示室をはじめ、ホールや会議室、学習室などの再開は2019年7月以降と予定されているため、友の会の活動は引き続き大きな影響を受けることになります。

同封の議案書をご検討・ご確認のうえ、多くの会員の皆さまに2019年度の活動へのご理解を深めていただけるよう、ご出席をよろしくお願いいたします。開催要領は以下の通りです。

●2019年度　友の会定期総会

日時：5月24日(金)13時15分開会

会場：江東区亀戸文化センター3階　カメリアホール
JR総武線・東武亀戸線「亀戸駅」
北口下車　徒歩2分

◇主な議案
- 2018年度事業報告ならびに収支決算報告
- 2019年度事業計画案ならびに事業予算案
- 役員および監事の選任

●藤森照信江戸博館長の記念講演会

総会に続いて、江戸東京博物館藤森照信館長による記念講演会が予定されています。演題は「日本の洋館」です。2年ぶりとなる藤森館長の講演にご期待ください。

●会員交流会

記念講演会終了後、17時より江東区亀戸文化センター2階の大研修室において、会員交流会を開催いたします。会員同士の交流、親睦を深める良い機会ですので、ぜひご参加ください。会費は2,500円です。

＊総会会場は昨年と同じ亀戸文化センターです。

催事案内

古文書講座

◆5月から第1期を開講

新年度第1期は5月から開講します。申込の受付は終了していますが、以下日程をお知らせします。受講票を持参の上必ず受講してください。また、参加費は釣銭のないようにお支払いください。

◆入門編　講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：5／8(水)、6／5(水)、7／3(水)

◆初級編　講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5／22(水)、6／19(水)、7／17(水)

◆中級編　講師：吉成香澄さん(徳川林政史研究所非常勤研究員)
- 開催日：5／11(土)、6／15(土)、7／20(土)

- 時間：各講座とも　午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：第1回、第2回(5月、6月)は新規館外会場
  JR錦糸町南口駅前「すみだ産業会館」
  入門、初級＝8階　　中級＝9階
  第3回は「江戸博1階会議室」に戻ります。
- 参加費：各講座とも全3回2,400円(初回一括払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展　「江戸のスポーツと東京オリンピック」

◆“東京2020”を目前に、7月6日(土)～8月25日(日)の間、「江戸のスポーツと東京オリンピック」の特別展が開催されます。本展では、江戸時代の運動や競技の紹介に始まり、近代スポーツの受容から、オリンピックへの参加、そして、悲願の東京開催までの過程を豊富な資料でたどります。本展企画担当学芸員から「見どころ解説」を聞き、会員だけの観覧会をゆっくりと心ゆくまでお楽しみください。

- 開催日：7月12日(金)
- 受付開始：16時30分
  17時～17時30分　見どころ解説(沓沢博行学芸員)
  1階会議室
  17時30分～19時　展覧会場自由観覧
  1階特別展示室
- 申込締切：7月1日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館　1階会議室／1階特別展示室
- 定員：120人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

見学会

『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町（7）

◆天保年間に出版された『江戸名所図会』は、江戸の風景を画家の長谷川雪旦が精密に描写した挿絵を満載したガイドブックです。今回は江戸から少し離れた所で、現在の杉並区に出掛けてみましょう。対象の挿絵は「堀の内妙法寺」と「大宮八幡宮」そして八幡宮近くにあった鞍掛松となります。徒歩距離は4kmほどで所要時間は2時間半を予定しています。解散場所は京王電鉄「西永福」駅前。

- 開催日：6月9日（日）小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：13時　受付終了：13時30分　（時間厳守）
- 集合場所：ＪＲ中央線「高円寺」駅南口
- 申込締切：5月30日（木）必着
- 定員：150人　同伴者可（保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記）
- 参加費：会員、同伴者とも500円（当日払い）

【企画担当責任者】下永博道（事業部会）

第10回「えど友会員発表会」の発表者を募集します

◆お待たせいたしました。昨年はお休みをいただいた「えど友研究発表会」は、名称を「えど友会員発表会」と改めて再開です。この会は、日頃の友の会活動の中で培われた様々な成果の発表を通じて、会員の意識向上と相互理解を深めることを目的としています。

◆「発表」は従来の研究成果をはじめとして、豊かな経験に基づく昔語り、サークルで学んだ技等々「江戸東京の歴史と文化に関するもの」であればジャンルを問いません。

◆「あなたが主役」の会員発表会です。多数の応募をお待ちしています。

【発表会概要】

・開催日時：8月6日（火）　13時～15時30分
・会場：江戸東京博物館・1階会議室

【応募要項】

・発表者は友の会会員に限るものとし、講演料などのお支払いはいたしません。
・発表希望者は、ハガキまたは電話で、「発表会応募：氏名、会員番号、電話番号、発表内容」を事務局までお送りください。折り返し「えど友会員発表会申込書」をお送りします。必要事項をご記入の上ご返送ください。申込書の提出をもって正式の応募といたします。
・応募締め切りは、5月16日（木）です。なお応募者多数の場合は調整させていただきますが、その結果につきましては6月上旬に応募者にご連絡します。

【企画担当責任者】川上由美子（事業部会）

会員優待のお知らせ

●特別展「江戸の街道をゆく～将軍と姫君の旅路～」

会　期：4月27日（土）～6月16日（日）
会　員：一般500円、65歳以上250円、大・専門生400円
同伴者：一般800円、65歳以上400円、大・専門生640円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●（注）割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●特別展「江戸のスポーツと東京オリンピック」

会　期：7月6日（土）～8月25日（日）

企画展のご案内

会期残り僅か お見逃しなく！

●「市民からのおくりもの2018」

会　期：3月19日（火）～5月6日（月・祝）
会　場：常設展示室　5Ｆ企画展示室

次回予告

●「発掘された日本列島2019」（仮）

会　期：6月1日（土）～7月21日（日）
会　場：常設展示室　5Ｆ企画展示室

休館日

5月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

6月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

催事のお申込方法

◆普通はがき（62円）に、①催事名（略名可）・開催日　②会員番号（必須）　③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1　江戸東京博物館「友の会事務局」

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日（10時～12時、13時～17時）**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてから ご参加下さい。

会報＜えど友＞第109号
令和元年5月1日発行（奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：林　正信（会長代行）　編集長：中村貞子
岡本 脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、小出雅右、横島利明、福田 徹、雨宮正彦
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1　電話03-3626-9910